

マラウイから学ぶ

鏡野町立上齋原中学校 担当教科：英語／家庭科／学活／道徳 松尾真理子

●実践教科：英語／家庭科／学活／道徳 ●時間数：32時間 ●対象学年：中学1～3年生 ●対象人数：1年生5人／2年生8人／3年生7人

実践の目的

- ・マラウイの生活のしかたや伝統文化を知ることを通して、いろいろな文化を尊重する気持ちを持つ。
- ・マラウイを通して、いろいろな視点から地球規模の課題を含め世界と自分とが繋がっていることに気づく。
- ・マラウイを通して、自分自身や自分の生き方を見つめ直す。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 ▼ 3	Let's write to the Malawian friends (各学年)	マラウイがどこにある国か知る マラウイの子どもたちにメッセージや紹介文を書く	世界地図 メッセージ用紙
4	アフリカのイメージは？ (各学年)	アフリカについて知っていることやイメージを書く	アンケート用紙
5 ▼ 7	水の使い方を考える (各学年)	自分の水の使用量を知る マラウイと日本の水事情の違いと水の必要性を考える 自分の水の使い方について考える	バケツ 計量カップ メジャー プリント 写真
8 9	マラウイのチテンジから衣生活を考える (1・2年)	チテンジの使い方を考え、マラウイの生活の知恵・文化に触れる 衣服と気候風土や生活様式の変化との関連を知る	チテンジ 色々な民族衣装の写真 プリント
10 ▼ 13	マラウイ料理から食文化を考える (1・2年)	主食のシマと副食を調理し、マラウイの食文化に触れる	マラウイ産のメイズ粉 紅茶
14 15	マラウイ料理体験から食生活について考える (1・2年)	マラウイの食事と日本の食事の共通点と相違点を考える 自分の食生活について考える	プリント 写真
16 ▼ 18	開発途上国と日本の関係を輸入率から考える (各学年)	推測した輸入率と実際の輸入率を比較し、日本での生活は輸入によって成り立っていることを知る。	パワーポイント マラウイ産コーヒー・紅茶
19 ▼ 21	世界の穀物と水について考える (各学年)	飢餓はなぜあるのか考える ビデオを視聴する どうすればなくなるか考える	VTRフジテレビ番組「あいのり」(03年、04年) プリント

22	Let's talk about Malawi. (1年)	写真を見てマラウイについて話す	写真、プリント、地図、 通貨MK
23 ▼ 26	Developing Countries (各学年)	Developing Countries Quizをする マラウイについて知る	パワーポイント プリント
27 28	人と「もの」のつきあ いかた (1・2年)	「もの」を「ごみ」にする人の意識や生 き方を考える	プリント 写真
29	ドーワ難民キャンプか ら人権について考える (1年)	ドーワ難民キャンプの様子を知る 難民の方の気持ちを考える 人権の大切さを知る	プリント
30	平均寿命から感染症対 策について考える (1年)	平均寿命を推測する 感染症対策を考える	CD「ディマクコンダ」 パワーポイント プリント
31 32	国際貢献について考え る (全学年)	元青年海外協力隊員のジュバテ麻子さん の話	パワーポイント、プリ ント ジンバブエ・ギニアの 品物や楽器
その 他		授業「フードマイレージ」(2・3年) 授業「フェアトレード」(各学年) 授業「命をいただく」(1年) 学校だより「アフリカイメージ」(全学年) 全校集会「机がほしい」(全学年)	プリント VTRテレビ朝日番組 「すてきな宇宙船地球 号 フェアトレード」 写真

授業の詳細

1～3 限目 マラウイの子どもたちにメッセージを書こう

私が夏休みにマラウイへ行くことになったこと、また、現地の学校を訪れるチャンスがあることを生徒に伝えた。生徒は、場所を確認した後、生徒と同じような年齢のマラウイの子どもたちにメッセージや日本の文化紹介などを書くことに取り組んだ。



〈所 感〉

最初は、マラウイと聞いても国なのか都市なのか、まして場所もわからない生徒が多かった。大きな掛図（世界地図）でマラウイの場所を紹介した後、マラウイでは母国語がチェワ語、英語は公用語であることを伝えた。

生徒は、マラウイの生徒に自分の表現したいことを各学年に応じて自分なりに英語で書くことができた。

4 限目 アフリカのイメージは？

今後の授業等に生かすために、生徒に対し、アフリカについて知っていることやイメージについてアンケートをとった。

〈所 感〉

生徒は、マラウイの場所がわかるようになった程度で知っていることは少ない。そこで、アフリカについてのイメージアンケートを行った。最も多いのは、動物・サッカーについてであった。また、社会科で学習した内容もあった。マイナスイメージのものもあったが、私が予測したより少なかった。エジプトや南アフリカ共和国にあてはまる内容もある。メディアの情報量のかたよりが影響していると考えられる。あらためて、情報とその伝え方が大切であると感じた。尚、アンケート結果は、後の授業や学校だよりの原稿等に活用した。

5 ～ 7 限目 水の使い方を考える

- ①手洗いに使用する水を計量する
(バケツに手洗いに使用した水を溜め、計量カップで計る)
- ②自分の水の使用量を知る (プリントに記入し、1日に使用する水の量を計算する)
- ③水の入ったバケツを頭に載せて歩いてみる
(水を頭に載せて運ぶ女性の写真を見て、3ℓの水が入ったバケツを使用)
- ④マラウイと日本の水事情の違いと水の必要性を考える
(マラウイでは井戸から水を得る。何回往復すると必要量が得られるか?)
※マラウイの井戸や手洗いの設備の写真を使用
- ⑤普段の水の使い方について考える
- ⑥学習内容をまとめ、意見・感想を書く



↑ただ今計量中



↑手が離せない!

〈生徒の反応〉

感想 ・手洗いに使う水の量は、人によって差があるなあ。
・バケツから手を離すのもむずかしい。重い、頭が痛い、水がこぼれたら濡れる!

水に関わる共通点 生きるのに必要、清潔にするためのもの、のどをうるおす、手を洗う

水に関わる相違点とその理由 水質、使い方、水の使用量、水のきれいさ

水の使い方について考えたこと 日本は水に恵まれている、私たちは使いすぎている

〈所 感〉

4kgほどのバケツも載せるだけでも大変で、大騒ぎだった。手を離すのもむずかしい。まして、歩くのは至難の技。ひとり1mたらず手離しでなんとか歩けた。用意したメジャーは無用であった。

マラウイの人は1回にどのくらいの水を運んでいるのか現地の青年海外協力隊員に尋ねたところ、中学生くらいの子なら20kg位ではないかということだった。3ℓずつ運んでいたら何往復しなければならないかが考えさせると、その大変さと水のありがたさをわかったようである。世界的水不足の問題については、後の授業で学習することを伝えた。

8～9 眼目 マラウイのチテンジから衣生活を考える

まず、マラウイのチテンジ（布）を紹介した。チテンジの使い方を考えさせた。実際にチテンジ着用体験を行い、マラウイの生活の知恵・文化に触れさせた。

衣服の基本の形はチテンジのように1枚の布を体に纏うことから始まる。色々な民族衣装を知り、それぞれの気候風土や生活様式の変化との関連を学習した。

〈所 感〉

チテンジは衣服としての役割もあるが、多様な使い方をするに大きな特徴がある。布を大切に最大限に扱っていることに気づかせた。また、チテンジは原点の平面構成から衣服の変遷を理解させるのにも役立った。また、チテンジ体験は男女を問わず、日頃できないことをするのでテンションは高くなり自由な発想が現れるようだった。



10～13 眼目 マラウイ料理から食文化を考える

- ① マラウイの主食であるシマと副食の作り方を知る
- ② 調理実習・試食
- ③ マラウイの人においしいものはときどき、「シマ」という答えが返ってくることを伝える

〈所 感〉

メイズ粉の原料のトウモロコシは、高温で光が多くあたる地域に適し、高地でかなりやせた土地でもよく育つのが特徴である。マラウイではシマが主食であるのはなぜなのか。世界の各地域ではその地域や気候の特色ある食材やその調理法は生活から生まれた食文化であることに気づかせるのが目的であった。シマ料理体験は日本で生活している生徒にとってカルチャーショックを受けたようだ。食料自給率や飽食・添加物の問題・食習慣についてあらためて考えさせたい。



14～15 眼目 マラウイ料理体験から食生活について考える

- ① 質 問 マラウイと日本の食生活の共通点はなんだろう？
- ② 質 問 マラウイと日本の食生活の相違点はなんだろう？
- ③ 体 験 マラウイと日本の食料自給率を比べてみよう

もし、日本産の食べ物だけで1日に必要な食事を準備するとこんなメニューが毎日続く。

朝食：米飯1杯・ふかし芋2個・ぬか漬け1皿

昼食：ふかしいも1個・焼き芋2本・りんご1／4

夕食：米飯1杯・焼き芋1本・焼き魚1切れ

- ④ 考える 人はその土地でとれるものを中心に利用して食生活を営んできた
 - ・ 地域に受け継がれてきた料理は、それぞれの地域や季節の食材を工夫して用いている
 - ・ 地域でとれる新鮮な食材を生かすことで、輸送のエネルギー消費が減るなどの利点

がある（地産地消）

食料を輸入すると水も輸入していることになる

⑤ **振り返り** 自分の食生活を見直してみよう。

〈所 感〉

日本人の嗜好と違う食べ物も大切な食料であることを少しずつではあるが理解してきている。また、その土地の気候風土で培われた食文化を尊重する姿勢を養ってほしいと思う。輸入ができなくなった場合の食生活や世界的な水不足の問題など、途上国と関連する多くの課題と関係する感想があったので、後日授業（19～21限目）で扱うこととした。

16～18限目 開発途上国と日本の関係を輸入率から考える

パワーポイントの画面を見せながら途上国からの輸入割合が大きいことに気づかせるようにした。

まず、様々な品物の輸入率を推測させた後、輸入率と途上国からの輸入率を知らせる（コーヒー・衣類・えび・そば・レアアース・石油・ガスなど）。

その後、もし、輸入がストップしたらどうなるか考えさせた。

〈生徒の反応〉

- ・ 途上国からの輸入はけっこう多いなあ。もし、輸入がストップしたら何かと不便になる。テレビも見られない。
- ・ 食べ物が減っていく。服がぼろぼろになる。夜、暗くてこまる。生活がなりたたない。学校どころでない。
- ・ 輸入ばかりせずに、国内で食べ物を作ればいいと思った。

〈所 感〉

生徒は日本での生活は食料に限らず、輸入によって成り立っていることに気づくことができた。

19～21限目 世界の穀物と水について考える

世界には、飢餓で亡くなる人が多い。以下、①～②を考えさせた後、フジテレビで放映された「あいのり」（'03, '04）の一部を視聴し、再度飢餓について考えさせた。

① 飢餓はなぜあるのだろうか

生徒の反応 →（ビデオ視聴前）

暑くて育つ植物が少ないから。土地が悪く植物があまり育たないから。

お金がないから。水が少ないから。栽培するところが少ないから。

人口が多いから。貿易をしてないから。

② 先進国の穀物の消費が多いのはなぜか、そのことについてどう思うか

生徒の反応 →（ビデオ視聴前）??? →（視聴後）不公平だと思う

③ 世界の穀物と水と飢餓について知る

- ・ 1年間に飢餓で亡くなる人は数万人。
- ・ 先進国は途上国の4倍の穀物を消費している。
- ・ 外国の肉牛は草を食べていることが多い。

日本の食肉和牛は霜降り肉のため牛の体重1kgあたり8kgの穀物を食べている。肉を食べるのは肉だけでなく、牛を育てるために与えたそれ以上の量の穀物を食べていることになる。

- ・ 食料を育てるのには水が必要。輸入する食料は途上国の水を使っている。

・「緑の革命」の影響。

(緑の革命：1940年代から1960年代にかけて高収量品種の導入や化学肥料の大量投入などにより穀物の生産性が向上し、穀物の大量増産を達成したこと)

・先進国の人たちが嗜好品に囲まれた生活を送れるのは、貧しい国の人たちの安い労働力があるから。

④どうしたら飢餓をなくすることができるのだろうか、それに向けて私たちにできることは何だろうか

生徒の反応 → (改善方法)

日本の食料多すぎる!! 輸入する量を3分の1減らしてアフリカに持っていく。

アフリカの人の賃金を高くする。どの国にも穀物を平等にわける。

牛に草を食べさせる。輸入ばかりせずに、国内で食べ物を作ればいい。

できるだけリサイクルする。フェアトレードをみんなに広める。

〈所 感〉

生徒の生活では飢餓は思いもよらないことである。飢餓で亡くなる人の情報はあまり耳にしないうが、世界的に見ると戦争でなくなる人(兵士及び民間人)より飢餓によって亡くなる人はずっと多い。その飢餓は私たちの生活と関わりがあるということを生徒は知ることができた。生徒なりに自分たちにできることを考えることができたが、本当の改善策はまだ手の届かないところにあると思っているようだ。

22 限目 Let's talk about Malawi.

Let's talk about this picture in English.

Where is Malawi? What time is it in Malawi? What language do they speak? What is this? How do you say "Mulikwanji?" in English? How do you say "Zikomo." in English? . . .

〈生徒の反応〉

It's in Africa? It's next to ○○. . . .

〈所 感〉

英語の教科書はTotal English1(学校図書)を使用している。Book1のLesson5にニュージーランド出身のMihiが自分の国について話すセクションがあり、その導入としてマラウイを取り上げた。

質問や、写真を見ながら写真からわかることをなるべく英語で表現させながらマラウイを紹介した。

また、マラウイではセカンダリースクールからすべて英語で授業が行われることを伝えた。知っている単語が少ないが、ALT(Assistant Language Teacher: 外国語指導助手)にもサポートしてもらい、英語でチャレンジしていた。

23~26 限目 Developing Countries (資料2・3・4)

まず、2分間でなるべく多くの国の名前を書かせた。その後、開発途上国のかかえる問題についてクイズを出す。後半は、学習した内容を確認できるよう、プリントのスペースに英単語を記入する活動を行い、意見・感想を書かせた。

〈生徒の反応〉

- ・私は学校に行くのは面倒くさいと思うけど、でも学校に行けない人もいることを知って、学校に行けるのは幸せだなと思った。
- ・途上国に住んでいる子どもたちは、学校に行きたくても行かなかったり、病気になっても病院に行けなかったりして、日本とは違うなと思いました。5歳以下で亡くなった子どもが多くてびっくりしました。
- ・I think it is not special for us to go to school. But it is very special for developing country people. So I have to be thankful about that.
- ・I think it's troublesome to go to school, because I don't like to study. Now I'm happy to go to school.
- ・I studied about Malawi.
- ・I think children have troubles.



↑ 授業中

〈所 感〉

今回の海外研修応募の動機となった3年生の単元（Lesson4 A Man's Life in Bhutan と Lesson5 Stevie Wonder,）の関連教材として取り上げた。1～3年生それぞれの学習段階に応じてアレンジして行った。3年生の授業は、上齋原学園（幼小中一貫校）の校内研修として、また鏡野町教育研究会英語部会として、学園内教員及び町内の教員に参観していただいた。時間が足りなくなり後半部分をスピードアップして進めたため、マラウイの写真をもっと見たかったという意見をいただいた。次の時間に今回できなかったところを補足する。伝えたいことが多いがもっと精選していかなければならないと反省している。

27～28 28 人々「もの」のつきあいかた

①鉛筆が落ちていたとしたら、あなたはどうしますか？

生徒の反応 →わからなかったら放置する。捨てる。きれいなら使う。持ち主がわかったらその人に返す。

気が向いていて徒歩でいける距離なら届ける。拾って交番に届ける。

②写真を見て何を何に使っているか考える



リール
↓
リールまわし遊び



石
↓
おもちゃ



キャットサバのつる
↓
縄飛び



ピン
↓
おもちゃ



ドラム缶のふた
↓
バーベキューの鉄板



豆
↓
駒

③「人」と「もの」のつきあいかた」を読んで、江戸時代の人とマラウイの子どもたちのくらし方を考える

(ごみ問題を解決するための) 意見を書く

生徒の反応 →ごみをださない生活をしている。(ものに) 新しい命を吹き込む。

マラウイの子どもは遊びの天才。3Rを意識する。使い捨ての物を使わない。

新しい考えがあって自然も汚れないしおもちゃを作れるし一石二鳥でいいと思う。

江戸時代は修理・再生・回収の専門家がいた。

マラウイの子どもたちはものを転用・変身させる知恵を働かせる。

まず、ごみを減らす以前にごみになる物を作りすぎなのだ。

〈所 感〉

JICAマラウイオフィスで紹介していただいた文章を使用した。ものが豊かになった日本はあらたな問題をかかえていることを認識するきっかけとなったと思う。今の生活の中で少しでも生かせることを願う。

29 限目 人権について考える(ドーワ難民キャンプから)

〔1〕HIVポジティブのサポートグループの大歓迎を受け様子とドーワ難民キャンプを視察した様子を伝えた。

HIVサポートグループ

歌って踊って明るく陽気。ネットボールもするなど、元気いっぱい。本当に病気なのかと不思議なくらいだ。

家はれんが作りで藁またはトタンの屋根の家に住んでいる。

ドーワ難民キャンプ

警戒している様子。

建物は支援や寄付による近代的な物が目立つ。店も連なりひとつの町のようになっている。病院もある。

ツチ族女性の話

ルワンダの虐殺から逃れてきたツチ族の女性は13人の子どもと一緒に4ヶ月間かけて状況下を歩いて来たという。「国に帰りたいですか。」という質問に「国が平和になってもひどい過去を思い出すので辛くて帰れない。」と答えた。

このインタビューは、日本語→英語→チェワ語→ルワンダの言葉と3人を介してできた。ルワンダの言葉とチェワ語ができるのは中学生くらいの女の子で、マラウイのチェワ語をマラウイに来てから覚えたようだ。顔や体に傷跡がたくさんあり、恐ろしい目に会いながらここまでやって来たのであろうと思われた。

〔2〕人権について学習する。

戦争や内戦など、最大の人権侵害である。難民たちは人権が奪われた状況だったことに気づかせる。

〈所 感〉

いつもなら写真を使って授業をするが、難民キャンプの写真は撮らなかった。それは彼らの身に何か降りかかってはならないし、とてもはりつめた空気があるからだだった。もちろん、彼らの気持ちも考えてのことである。ちょうど人権週間が近くなり、難民キャンプを取り上げた。私にはHIVポジティブのサポートグループの様子とドーワ難民キャンプを視察した様子が対照的と

思われたと話を切り出したが、病気の人の心の底の不安を想う生徒もあり、生徒たちの心のやさしさにも触れることができた。

30限目 平均寿命から感染症対策を考える

- ①元マラウイ青年海外協力隊員・山田耕平氏のエイズ予防啓発ソング「ディマクコンダ」を聴く。
- ②マラウイの平均寿命は何歳でしょうか。なぜ、40歳なのでしょう。
- ③感染症対策のために何ができるのでしょうか。国際協力では。自分達にできることは。
- ④「ディマクコンダ」の意味を知る。

〈所 感〉

最初に「ディマクコンダ」をきかせて、どんな歌だと思うか想像させた。チェワ語の歌詞はわからないので、内容はわからない。生徒はなぜ平均寿命が若いのかという原因やまた感染症対策などの学習に、こののりのよい曲は希望を持たせ明るさをもたらした。最後に歌詞の意味を知らせたが、さまざまな支援の方法があることも感じたのではないかと考える。

31～32限目 国際貢献について考える

ジンバブエで青年海外協力隊活動経験のあるジュバテ麻子さんにお話していただいた。

〈生徒の反応〉

- ・援助慣れということばを初めて聞きました。私は今まで、貧しい国の人たちに、お金や物を寄付すると、その国の人たちはすごく喜んでくれて感謝されるんだと思っていました。でも、寄付してくれるのが当たり前になっていることがわかり、ショックを受けました。
- ・お金や物だけではその国の人々にいい影響をあたえないんだなと思った。
- ・今日聴いた演奏の楽器はほとんど手作りだと聞き、びっくりしました。見たことのない楽器がたくさんあった。

〈所 感〉

実際にジンバブエに2年間住み、活動をされた経験を持つジュバテ麻子さんのお話は説得力があった。国際貢献のあり方やジンバブエの人との交流、彼らの物を生かす知恵など、物が豊かなことが本当に豊かなのか考えることができた。また、パートナーのアラマさんとの演奏もアフリカの魅力に溢れ、来ていただいてよかったと思う。



↑ ジュバテさんのお話



全体を通しての成果と課題

○英語科では、国際協力・国際理解・アフリカをはじめとする途上国の問題などを初歩的な英語を通して理解した。関連教材を取り入れたことで教科書の題材をより深く学習することができた。英語が世界で多く使用されていることを理解する一端にもなったと思う。家庭科では、マ

ラウイを例として各国各地域の気候風土から生まれた生活・文化を尊重することを大切にした。擬似体験は生徒たちに強いインパクトを与え、自分たちの生活は途上国と大きな関わりがあることに気づくことができた。道徳では、生徒の中にある「上から目線」に気づかせ、心に問いかけることができた。元青年海外協力隊員の方に国際協力について話をしていただき、本当の援助とは何かを考えさせるよい場になった。生徒が学習したことは教科を越えて感化し合い、世界的な広い視野でさまざまな視点から考える素地となることを願っている。

- 多くの授業の中にマラウイ研修で得た写真またはそれが含まれるパワーポイントを使用した。また、日本で得たその他の音声・映像資料も使用した。それらは、生徒が理解したり、考えたりするきっかけを作るのに大変効果的であった。
- 生徒の今の生活が恵まれていてよかったということだけに終わらないように留意した。今の生活とつながりがあることに気づかせるようにした。
- 感想や反応から、生徒は学習により以前より世界を身近に捉え、例え簡単なことでも自分のできることがあると考え始めたことがわかる。今回学習したことが深化して成長の糧となり、今後の生徒自身の言動や生き方をより変革させ成長させていってほしいと思う。
- 各学年を対象に私の受け持つ授業の中でマラウイ研修を生かす授業を積極的に試みてきたが、各時間の学習内容は単発的だったところもあるかもしれない。時間が当初より計画に入っていれば、系統だてたり調べ学習を取り入れることができたであろう。また、同じテーマであってももっと深化させることができたのではないかと思う。
- 私が研修に行って一番印象的だったのは、何が本当に幸せなのかという心のことだった。物やお金があることなのか。今の日本は幸せなのか。視察した青年海外協力隊員やシニアボランティアの方々の活動や環境問題、その解決方法なども考えさせる時間を十分持てなかったのは残念である。
- 自分がマラウイ研修で得た伝えたいことは膨大であることをあらためて感じている。それを今後も、取り入れていきたい。計画的に工夫・構成・改良して、今回できなかった授業を作っていきたいと思う。

参考資料

【書籍】

- ・ JICA地球ひろば発行
「世界の水問題」「世界の食料」「いのち、輝け!」「砂漠化する惑星」「学校に行けない世界の子どもたち」
- ・ JICA地球ひろば・川合優子(2009)「集まれ!地球の教室」
- ・ 国際協力機構(2010)「JICAの仕事 みんなでつくる、よりよい世界。」
- ・ 国際協力機構(2009)「学校に行きたい!」
- ・ 光文社国語教科書「人と『もの』とのつきあいかた」
- ・ JICA中国平成20年度教師海外研修教師海外研修国際理解教育実践報告書
- ・ JICA中国平成21年度マラウイ教師海外研修教師海外研修国際理解教育実践報告書
- ・ 開発教育協会「フードマイレージ どこからくる?私たちの食べ物」
- ・ Total English(学校図書)

【音声・映像資料】

- ・ 山田耕平「ディマクコンダ」(CD)
- ・ フジTV系列(2003)(2004)「あいのり」
- ・ TV朝日系列「すてきな宇宙船 地球号 フェアトレード」

【インターネット】

- ・ 「マラウイの概要」 <http://www.h4.dion.ne.jp/~malawi/outline.html>
- ・ 「水と共に暮らす」 <http://www.kkj.or.jp/contents/event/winter07/07winter.html>
- ・ 「日本マラウイ協会」 <http://www.h4.dion.ne.jp/~malawi/top.html>
- ・ 「どうなってるの?世界と日本」 <http://www.jica.go.jp/world/interdependence/>
- ・ 「水資源と世界の穀物生産」近畿大学農学部八丁信正 <http://www.jacaf.or.jp/news/lecture.2.2002.2.pdf>
- ・ 「第8回エコロジー」 <http://www.ofours.com/chouri/eco-8.html>
- ・ 「JICA HP」 www.jica.go.jp
- ・ 「なんとかしなきゃ」 <http://nantokashinakya.jp>